県南家畜市場通信

令和７年２月号

２月に入ってもまだまだ寒い日が続きますね。今回のテーマは卵胞嚢腫（らんぽうのうしゅ）です。
この病気について理解を深め、繁殖成績の向上につなげましょう！

『卵胞嚢腫（らんぽうのうしゅ）』の予防と対応

何日も粘液を出していて、落ち着かない牛がいるんだよね。これって発情が来てるのかな？

発情徴候が何日も続いているのなら、それは**卵胞嚢腫（らんぽうのうしゅ）**かもしれません。
卵胞嚢腫は、卵巣にある卵胞が排卵しないで異常に大きくなる病気です。卵胞嚢腫の牛は、**ずっと発情したような状態になったり、逆に発情が来なかったり**します。

何が原因で起こるんだろう？

明確な原因はまだはっきりと解明されていません。
エネルギー・タンパクの過不足やビタミン不足などが卵胞の発育や卵巣の機能に影響を与えて起こると言われています。
現在のところ、原因と考えられているものは右のとおりです。

考えられる原因

- **タンパク質の過不足**
- **エネルギーの過不足（過肥、削痩（さくそう））**
- **ビタミン不足**
- **ストレス**
- **高齢**
- **遺伝**

等

卵胞嚢腫にならないようにするにはどうすればいいんだろう？

エネルギー・タンパク質の過不足がないようにしよう

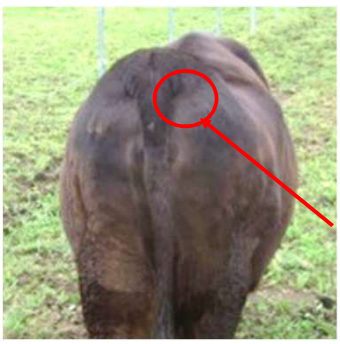
給与する飼料中のタンパク質やエネルギーに過不足がないようにすることが重要です。
過不足があると、牛の栄養度や被毛、糞便にサインが現れます。
栄養度などが**どのように変化するか**をよく観察し、過不足のサインを見つけたら、飼料の内容を調整しましょう。

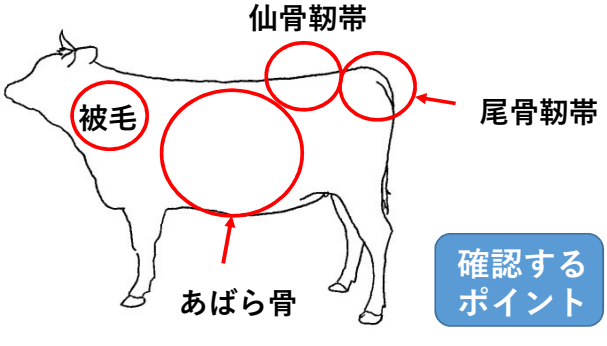
エネルギー（TDN）

- 過剰 → 過肥 → **仙骨靭帯と尾骨靭帯が見えない**
- 不足 → 削痩 → **あばら骨が４本以上見える**

タンパク質

- 過剰 → **被毛がテカテカになる**、**糞便が軟らかくなる**
- 不足 → **被毛がボサボサになる**





ビタミンを補いましょう

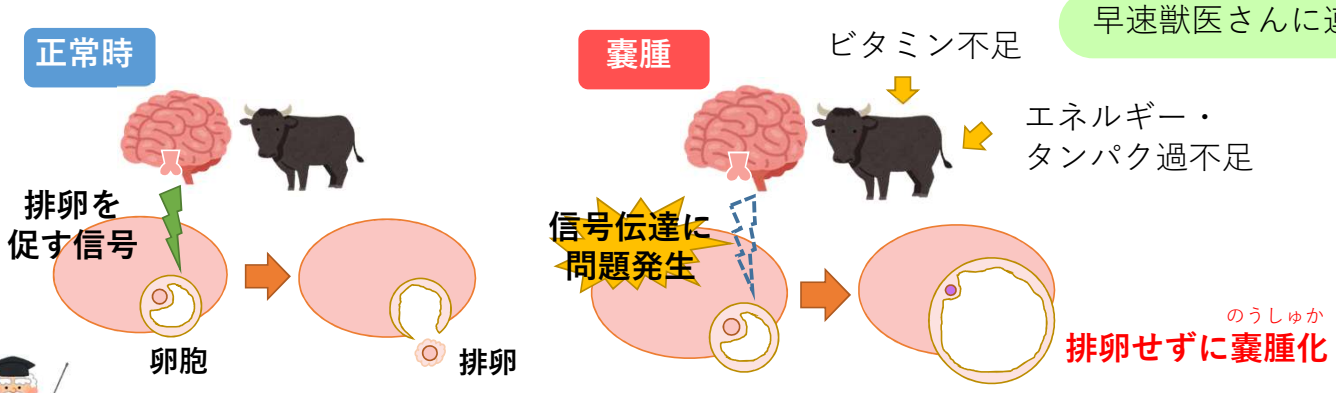
ビタミンは卵巣機能の維持にとって重要な成分です。
通常は、ビタミン剤を給与しますが、春～秋であれば、ビタミン剤だけに頼らず、生草等を給与することも有効です（生草は、ビタミンAの元になる「β-カロテン」や「ビタミンE」を多く含んでいます）。
また、ビタミンDは、**日光浴によって体内で合成されます。天気の良い日中**は外に出すことも有効です。**１～２時間、外につないで**おくだけでも効果があります。

獣医さんに診てもらおう

卵胞嚢腫かもしれない牛はどうすればいいの？

「発情がずっと続いている」「発情予定日を過ぎても発情が来ない」時は、すぐに獣医さんに診てもらいましょう。
卵胞嚢腫は、排卵を促す信号伝達がうまくいかないことで起こります（下図）。治療では、GnRH等のホルモン剤を使います。子宮内膜炎を併発している場合もあるので、膣鏡などを使って確認してもらいましょう。

早速獣医さんに連絡しよう！



卵胞嚢腫に限らず、分娩後60日を過ぎても授精できないときは、獣医さんに診てもらいましょう。これが繁殖成績改善につながる重要なポイントです。

≪子牛を大きく育てよう！≫～岩手県肉用牛飼養管理マニュアルから～

マニュアルのダウンロードはこちら→

○離乳のポイント

離乳のタイミング

スターターの摂取量（最低２kg/日以上を安定的に摂取）を目安に発育、被毛の状況などを踏まえて判断しましょう。

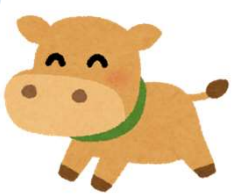
離乳のストレスを減らす工夫

離乳時のエサ・環境の変化は、子牛にとって大きなストレスになるため、エサの食い込みが落ちたり、免疫機能が低下したりする恐れがあります。
離乳のストレスを減らすため、👇の方法に取り組んでみましょう！

- 育成用配合飼料に慣らしてから母牛と分離（移動）する
  ⇒スターターに育成用配合飼料を混ぜ、約２週間かけて段階的に変更する
- 子牛ではなく、母牛を移動する
- 群を移動するときは、できる限り一斉に動かす

同時に２つ以上のストレスがかからないようにしましょう！

離乳は牛の生涯の中で最初に訪れる一大イベントです。
離乳を上手に乗り越えられたら子牛の管理はほぼ成功といえます。



（お問合せ）奥州農業改良普及センター0197-35-8451 / 一関農業改良普及センター0191-52-4961